横浜市立 井土ケ谷小学校　　学校評価報告書　　（ 令和 4 ～ 6 年度 ）

重点取組分野	令和 4 年度 具体的取組	令和 4 年度 自己評価結果	総括
生きてはたらく知	①授業のユニバーサル化を意識した授業展開を図るとともに、習熟度別の授業形態を取り入れ、学力向上を目指します。 ②「つながりを生かして学びを深める子どもの育成」を研究主題とし、問題に対して、「ひと」「もの」「経験」を生かして子どもが主体的に解決していける「まなびの環境」を整えます。	①子どもの実態に合わせて、少人数学習できるので、子どもが自ら学ぼうと意欲的に取り組んでいる様子がみられた。 ②校内重点研究として行った授業研究会や、11月に行った研究発表会でもその成果を様々評価してもらったが、日頃からつながりを意識した指導を行うことがたち説であると再認識した。	A
豊かな心	①道徳科と他教科・領域や学校行事との関連を意識して道徳科の授業を充実させ、子ども人権会議、市・区子ども会議・横浜国際平和スピーチコンテスト等の活動を通して、多文化共生の心や人権感覚を高めていきます。 ②読書センターの充実を図り、司書教諭、学校司書やボランティアを活用し、豊かな心を育てる読書活動を推進します。	①子ども会議の取り組みは担当者を中心によくできた。しかし、直接かかわるのが、限られた児童なので、全体に広げていく方法を考えてきたい。 ②毎週水曜日の「朝の読書タイム」は、担任自身が読書の楽しさを伝え、実践することで子どもたちの意欲が高まり、楽しむ姿が見られた。次年度も継続して取り組んでいきたい。	A
健康教育	①規則正しい生活習慣（早寝・早起き・朝ごはん）の定着を図り、バランスイーナタイムを中心とした食育と学校保健委員会の充実を図り、家庭と連携しながら、体育科の授業、休み時間等を活かして「体力向上」に努めます。 ②校内放送や食育だより、保健だよりで健康教育に関する情報発信を逐次行います。	①運動・保健・給食などの委員会活動では、高学年が中心になって体力向上を意識した取り組みを行うことができた。次年度は、取り組みをより積極的に発信していけるように工夫していきたい。 ②コロナ禍で黙食になっているので、給食時に栄養教諭から校内放送を毎日行い、全児童がよく聞いていた。その放送から食に対する関心が高まってきている。	A
安全管理 地域連携	①交通安全教室や防災訓練に参加する中で「自分の身は自分で守る」意識を高め、安全教育の充実を図ります。②教職員に安全管理の研修を継続的に行い、不審者対応や地震・災害発生時に命を守る行動ができるようにします。③地域と一体となった安全に対する意識を高められるように連携を深めていきます。	①行事や朝会などで定期的に「命を守ることの大切さ」を校長、専任、安全主任を中心に発信し、訓練や交通安全教室以外でも子どもたちの意識を啓発をすることができた。 ②不審者対応では、児童の訓練だけでなく、職員の訓練も行い、対応について毎年協議している。 ③地域防災拠点訓練では、地域の方に、校内の防災設備を見ていただき、災害時に学校ができることを確認、共有することができた。	A
いじめへの対応	①全職員が子どもの気持ちに寄り添い、アンテナを高くして、いじめの未然防止・早期発見・積極的認知を行います。 ②月１回定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、認知された案件の経過確認をていねいに行うことで再発防止に努めます。児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制づくりをします。	①児童支援専任を中心に校内でいじめの早期発見に組織的に対応してきた。 ②いじめ認知した案件について、いじめ防止対策委員会を中心に、組織的に再発防止に努めることができた。しかし、いじめの防止に十分はないと考えている。次年度も日頃からより一層アンテナを高くして、いじめの未然防止に努めていきたい。	A
人材育成・ 組織運営(働き方)	①組織・校務分掌のつながりを明確にし、PDCAサイクルを実践しながら人材を育成していきます。②組織の効率的な運営を図り、教職員間の情報交換や意見交換が活発に行われるようにします。③子どもと向き合う時間の確保を目指して、業務アシスタントの活用や業者を導入するなど業務の効率化を図ります。	①組織図に集約された校務分掌をもとに全職員が自分の立場を理解しながら仕事をすることができた。 ②③放課後に会議を精選し、必要最低限に絞っている。職員間の情報共有や教材研究をする時間が増えた。 ②③業務削減は進んでいるが、教育委員会や管理職頼みではなく、一人ひとりが目指していくことで、より一層の業務精選し、子どもと向き合う時間を確保していきたい。	A
アクティブセンター構想	①特別教室の施錠をなくし、フリーアクセスとし、アクティブな学びが常にできるように校内環境を整え、活用します。②図書館の書籍を校舎の必要な場所に配置し、ICT機器とともに全児童がいつでも情報収集・発信できる環境をつくります。 ・読書センター、メディアセンター、コミュニケーションセンター、アクティブステーション、学習センター、ミーティングスタジオ、Work わ～くスペース等の設置と活用	①理科室の前など、図書資料が校内に分散配備されたことで、子どもたちが情報収集をしやすくなった。 ②本格的に取り組み始めたのが今年度からなので、もう少し周知・活用に時間がかかる。次年度以降、教育環境のより効果的な活用方法を考えていきたい。	A
特別支援教育	①高学年に少人数習熟度学習を取り入れ、どの子どもにも学びへの意欲や理解の深まりの機会を保障します。 ②校内特別支援委員会を活性化させ、個別支援学級と一般学級の連携を深め、特別な支援を要する児童への支援の在り方の理解を深めます。③関係機関と協力して支援の方法を工夫し、家庭と連携しながら実践していきます。	①算数少人数習熟度学習では、児童がめあてや自分の力にあった学習をすることができ、学習への意欲が高まっている。また、自己有用感、規範意識の向上が見られた。 ②校内で積極的に報告、連絡、相談ができ、関係機関とも組織的な連携がとれてきた。次年度もより一層特別支援教育に力を入れていきたい。	A
児童支援	①「い」いのちを大切にする・「ど」どこでもいつでも・「が」外部機関と連携する・「や」やさしく寄り添うの「い・ど・が・やの児童支援」を全職員で共有し、支援していきます。②児童支援専任を中心に情報を共有し、未然防止と組織的対応に努め、対処療法ではなく、課題を根元から絶つように努めます。	①「い・ど・が・やの児童支援」について、朝会や避難訓練、学校だよりなどで保護者に知らせるなど、浸透に努めた。次年度以降も継続して発信していきたい。 ②学年主任を中心として学年で、児童支援専任を中心として学校全体で情報共有ができました。次年度もよりよい連携の仕方を考えていきたい。	A
地域学校協働活動	①南中学校ブロックで3校合同の学校運営協議会を設置し、９年間を見通した子どもの育成を地域とともに考えていきます。 ②学校地域学校協働本部、スクールゾーン対策協議会等を活用し、情報交換を密にして、地域との意思疎通を図り、開かれた学校創りを推進します。	①コロナ禍で中学校の参観などができず、全職員が中学校ブロックで連携しているという意識をもつことが難しい面があった。今年度から学校運営協議会を南中学校ブロックで開催となったので、次年度以降、より連携を深めていきたい。 ②地域のみなさんに開かれた学校として多くの情報開示を行ってきた。また、コロナ禍でストップしてしていた行事等も精選しつつ実施してきたい。	B
ブロック内評価後の気付き	合同授業研究会を通して、子どもたちの学びの姿の実態を把握することができた。また、小中での情報共有を図ることができた。中学校で実施した職員人権研修に小学校の人権担当にも参加、地域の課題や人権意識・人権感覚を高めるための人権教育について共に考える機会を作った。中一ギャップや中学校入学後の不安を少しでも解消できるよう、小学校が求めることや中学校が伝えたいことを共有した。また「9年間で育てる子ども像」を各校で再認識した。コロナ禍以前の活動に戻りつつある中で、次年度は、ブロックで掲げるキーワードを職員が確認し、どのように児童生徒の指導に盛り込んでいくかを考え、共有をしていきたい。		
学校関係者評価	生きてはたらく知に関しては、一番力を入れていることが伝わってくる。子どもたちが学びたいと思える環境づくりは引き続き行っていってほしい。いじめへの対応に関しては、とても大切なこと。今も大切にやってもらっているが、一人ひとりに寄り添って今後も力を入れてやってほしい。 地域学校協働活動に関しては、少しずつコロナの影響も少なくなってきた。来年度はもっと町に出て活動をしてほしい。		
中期取組目標振り返り	「授業のユニバーサル化と学習環境を整備し、子ども一人ひとりに寄り添った、いじめのない風土をつくり、活力と魅力にあふれた学校」に向けて大きく動き出した１年間だった。アクティブセンター構想をもとに学習に使えるスペースやGIGA端末に対応した授業を想定した環境整備が進んだ。特別支援にも力を入れ、算数少人数習熟度別学習や教育相談、各種アンケートの分析などを行い、学習や学校生活で課題を抱える児童について職員で共有しながら進めてきた。今年度から始まった取り組みも多いので、次年度も微修正しながら継続し、定着をはかっていきたい。		

重点取組分野	令和 5 年度 具体的取組	令和 5 年度 自己評価結果	総括
生きてはたらく知	①授業のユニバーサル化を意識した授業展開を図るとともに、習熟度別の授業形態を取り入れ、学力向上を目指します。 ②「つながりを生かして学びを深める子どもの育成」を研究主題とし、問題に対して、「ひと」「もの」「経験」を生かして子どもが主体的に解決していける「まなびの環境」を整えます。		
豊かな心	①道徳科と他教科・領域や学校行事との関連を意識して道徳科の授業を充実させ、子ども人権会議、市・区子ども会議・横浜国際平和スピーチコンテスト等の活動を通して、多文化共生の心や人権感覚を高めていきます。 ②読書センターの充実を図り、司書教諭、学校司書やボランティアを活用し、豊かな心を育てる読書活動を推進します。		
健康教育	①規則正しい生活習慣（早寝・早起き・朝ごはん）の定着を図り、バランスイーナタイムを中心とした食育と学校保健委員会の充実を図り、家庭と連携しながら、体育科の授業、休み時間等を活かして「体力向上」に努めます。 ②校内放送や食育だより、保健だよりで健康教育に関する情報発信を逐次行います。		
安全管理 地域連携	①交通安全教室や防災訓練に参加する中で「自分の身は自分で守る」意識を高め、安全教育の充実を図ります。②教職員に安全管理の研修を継続的に行い、不審者対応や地震・災害発生時に命を守る行動ができるようにします。③地域と一体となった安全に対する意識を高められるように連携を深めていきます。		
いじめへの対応	①全職員が子どもの気持ちに寄り添い、アンテナを高くして、いじめの未然防止・早期発見・積極的認知を行います。 ②月１回定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、認知された案件の経過確認をていねいに行うことで再発防止に努めます。児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制づくりをします。		
人材育成・ 組織運営(働き方)	①組織・校務分掌のつながりを明確にし、PDCAサイクルを実践しながら人材を育成していきます。②組織の効率的な運営を図り、教職員間の情報交換や意見交換が活発に行われるようにします。③子どもと向き合う時間の確保を目指して、業務アシスタントの活用や業者を導入するなど業務の効率化を図ります。		
アクティブセンター構想	①特別教室の施錠をなくし、フリーアクセスとし、アクティブな学びが常にできるように校内環境を整え、活用します。②図書館の書籍を校舎の必要な場所に配置し、ICT機器とともに全児童がいつでも情報収集・発信できる環境をつくります。 ・読書センター、メディアセンター、コミュニケーションセンター、アクティブステーション、学習センター、ミーティングスタジオ、Work わ～くスペース等の設置と活用		
特別支援教育	①高学年に少人数習熟度学習を取り入れ、どの子どもにも学びへの意欲や理解の深まりの機会を保障します。 ②校内特別支援委員会を活性化させ、個別支援学級と一般学級の連携を深め、特別な支援を要する児童への支援の在り方の理解を深めます。③関係機関と協力して支援の方法を工夫し、家庭と連携しながら実践していきます。		
児童支援	①「い」いのちを大切にする・「ど」どこでもいつでも・「が」外部機関と連携する・「や」やさしく寄り添うの「い・ど・が・やの児童支援」を全職員で共有し、支援していきます。②児童支援専任を中心に情報を共有し、未然防止と組織的対応に努め、対処療法ではなく、課題を根元から絶つように努めます。		
地域学校協働活動	①南中学校ブロックで3校合同の学校運営協議会を設置し、９年間を見通した子どもの育成を地域とともに考えていきます。 ②学校地域学校協働本部、スクールゾーン対策協議会等を活用し、情報交換を密にして、地域との意思疎通を図り、開かれた学校創りを推進します。		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			

重点取組分野	令和 6 年度 具体的取組	令和 6 年度 自己評価結果	総括
生きてはたらく知	c1		
豊かな心	c2		
健康教育	c3		
安全管理 地域連携	c4		
いじめへの対応	c5		
人材育成・ 組織運営(働き方)	c6		
アクティブセンター構想	c7		
特別支援教育	c8		
児童支援	c9		
地域学校協働活動	c10		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			